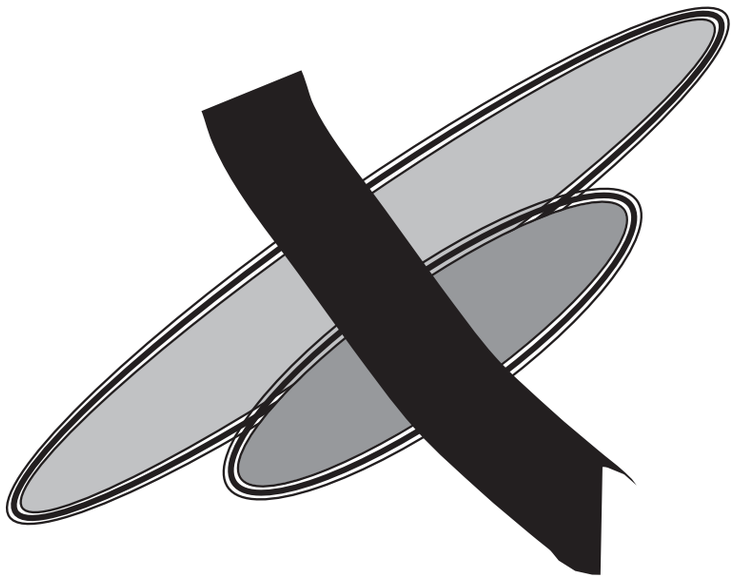
月　刊

Mélange

Vol.127



2017.10.29

詩と評論

月刊「Mélange」 Vol.127 2017.10.29 「月刊めらんじゅ」編集部

「月刊めらんじゅ」127 号　目次

詩

雨詠 ……岩脇リーベル豊美　03
衝動……野口裕　04
アイドル・タヌキ岩で思う ……北岡武司　05
ね、かげろう ……中堂けいこ　06
なぎさへ　……大橋愛由等　07
「あいだ」の断絶を超えようとするパラノイア的な意志から招来される音像 ……有時秀記　12
冬の夜空に漂うものが確かにわたしを追い越すことのないという幻想 ……月村　香　13
硝子工房／駐車場 ……中嶋康雄　14
ほえるテクノロジー ……高谷和幸　15

お知らせ

「吟遊カルメン神戸句会 2017.11.19」のお知らせ ……　11

資料・神戸から島尾敏雄を問うリレートーク

神戸から 島尾敏雄を問う　資料編〈10 月 21 日神戸文学館〉……　08

連載／エッセイ

神戸詞あしび 116「のっぴきならぬ尾崎翠と風土の接合関係」……大橋愛由等　16

編集部だより★46／台風の直撃ではないが、何年かぶりに台風の猛威にさらされてしまった。10 月 22 日（日）のことである。午前中は台風の接近など他人事のような神戸だったが、夕方に近づくにしたがって、雨風が強くなってきた。フラメンコのリハーサルが午後 3 時から始まったものの、ライブ会場にお客さんが来る気配がない。そこで出演者はライブの始まる午後 8 時をすこしすぎてお客さんが来なかったら、中止しようなどと喋り合っている。しかし風雨はますます激しくなり、とうとうその日のライブは中止となった。出演者の中には、大阪方面に帰るひともいるので、早めの帰宅を促した。ライブ会場もお客さんが来そうにないので、午後 6 時に店じまいとした。強い風が電線をゆらし、街をなぶっている。いそいで三宮駅に向かうが鉄路はすべて運転休止。改札口には多くの帰宅難民が集まっている。午後 9 時すぎ、阪急電車が運転再開するとのネットニュースが流れて駅に向かったが強風がやまず結局その日の運転は見合わされた。仕方なく三宮で翌朝まで過ごし、始発は動いているだろうと三宮駅に向かった。JR は一時間後に運転開始というので阪急にのって帰ってきた。なんどか止まりながら目的の駅まで到着した。その日からしばらく電車と帰宅の恐怖症になり、果たしてこの電車は動くのだろうかとトラウマに悩まされたのである。（大橋記）

◆雨詠

岩脇リーベル豊美

きみが雨粒を弾いているから雨になる
虹雨にまだ濡れていたい工事現場クレーン
幻視・幻想と日常周波数重なる工事現場
星屑の積もる山裾朝霧となり
アクリルの毛布編みはじめて晩夏
わたしワーカホリック有閑マダムに見惚れ
元気そうでと逃げて元気じゃないと返す
ちょと疲れた呟くと剣道勧める旧知
遠足のギムナジウム生徒と秋気乗り込む
歪む尾骶骨再編成し常夏のアジア指
豚肩肉を食べる時刻には誰か命尽き
山上の修道院朝陽に露結ぶ
月明り騒がしい雨になりました
革命の只中革命かと疑うヒメジオン
クラフトビア大を頼むと君笑う洞窟
仮想・現実・未来像エネルギーチャーヂする
隠れ家をさがす麦畑の真っ裸
聖霊降臨後ひとはだんだん醜くなる
こんなに詠んでやっぱ納得していない
黎明の近き海が砂丘をあなたと歌う
壊れると樅の木と教会の塔窓開く
夫の還暦白アスパラの皮を剥く
もくもく雲は病気と本気の境界線
親族総出アスパラ収穫虹の雨が降る

◆衝動

野口 裕

どうしようもなく
つまらない詩一編を書き
捨てた

破片は切り刻み
呑みこむとして
我が胃液に期待しよう

それにしても
なんで俺自身は溶けないんだ
ラクダを通す針の穴よ

◆アイドル・タヌキ岩で思う

北岡武司

タヌキ岩に腰をおろす。うまのせ山が正面を剥きだしている。秋だ。真昼の陽光が山のフェイスでたわむれ、周りの木々を暖める。ポンタは背中を岩肌にゆだねた。日輪からひろがる光の強烈さに瞼をほそめる。こうしていると、ときの外に追いだされていたことがふとときへもどってくることがある。— あれはあの国のカフェだった。新聞を読んでいると、おおきなテーブルむこうで老婆がソファに腰を下ろした。「日本人のくせに、新聞が読めるのかね。日本人は英語しかできないけどね」生意気なポンタは意地悪になり、かの国でタブーとされていることを話題にした。老婆は泣きだした。

嘘かもしれないなんて あのとき 誰も思わなかったわ 思い浮かばないわけではなかったけど 意識に昇ってきても泡のようにすぐにはじけてきえたの 時代の寵児への熱狂が意識における現実だったのよ 彼は偶像よアイドルよ 私たちはアイドルがほしかった誰もが指導者を求めたのよ そんなとき彼があの小男が 力強くあらわれたの 沸騰する時代のなかへ颯爽と 時代も世界もますます煮えたぎったわ 地獄のように 地獄だとは思わなかったけれど

言葉に力があったし 集会場やラジオで演説を聴いた人はみんな熱狂したわ 歓声をあげるとき 胸がはちきれそうだった 涙がかぎりなく溢れてきた 彼の熱狂がみなに乗りうつったの 何かが彼に憑依して それがみなに電波のように発信された ひょっとしたらそれは歴史を操るデーモンからきていたのかもしれない 「どんな夢でも描ききれない現実を手に入れるんだ」と そんなことを語ってくれた 「ときは近い」と両腕をあげて力を示し 髪の毛がゆれるほど頭をふったわ その姿のどこに嘘があったのでしょう

ああ 私たちは陶酔してひとつになりたいと願ったわ 彼というワインでみな溶けあえるように思ったの 彼がいいだしたことが起こっだなんて あとから心理学者もネクロフィリアとよ 心理学者も歴史学者もことをいうけれどてからは まことしやかなことは起こってしまうまでは誰にも何にも分らないのよ そうよ 歴史は歴史が起こるまで誰にも分からない 歴史のただなかにいるときも 何が起こっているか分からないものなのよ 火山の噴火で翻弄される人々は起こっていることの全体を思い浮かべることができないのよ

火山は騙すわけじゃない でも私たちは騙されたのよ 民族を導いてくれるアイドルを求めていたのは私たちだったの だから騙されたのよ みんな騙されたかったのよ みんなすすんで騙されたのよ うすうす知ってたわよ そりゃ 姿を消した人々が遠い街で煙になっているなんて そんな噂も風が運んできたわ 風には煙の臭いもしたわ

人はアイドルが好きだ。騙されるのが好きだ。命は何かに捧げられなければならない。相対を絶対化して命を賭ける。相対が相対にすぎないことが分かると騙されたとこぼす。

俺は睫毛にできる虹が好きだ。ポンタは日輪に向かって目を細めた。それにしても俺はどうしてあの老婆に、あんなにも喋らせてしまったのだろう。老婆の涙が思いだされる。涙が嘘だったかもしれないとは、露ほども思わなかった。雲が太陽に近づく。もうすぐ陰がくるだろう。饒舌な追憶につきあったあと、いつしかポンタは眠り込んでいた。

◆ね、かげろう

中堂けいこ

ほむらうる　有毒の花弁まき散り　いきいき頭上から　終わりの見えない
雲壌をうめる藍　あやめ色　つきささる刀とおぼしき葉葉
ねもとに　ほら　わたしの詩、し、をほおむる
すでにマスキングテープの角角をめぐり　り、そうだ、顔料と韻律は似ている

ね、ブリキの如露が音をたて　水藻、澱み、そこだ、
わたしの詩、し、
あるかなしかの　ほむらうる　葉葉うらに蜻蛉、かげよ、
きみがいう、ね、水では腐らないのだと
桎梏の水底にうすい紙切れの白さうらおもてのなさ
わたしは白紙だ

◆なぎさへ

大橋愛由等

鉄路をたどると人魚が傘をさしている
(横書きのノオトをひとつ。そして縦書きのノオトはあの棚の上。「つたない詩篇を纂めよう」と午前九時半のラヂオは誘惑している。いいんだ、番の香料を棚の上においても。広げたノオトは閲覧していいよ。アサギマダラがしっかり読んで南溟に伝えてくれるから。双鳥が真上を飛びすぎたからといって大声をださなくてもいいと思う。生まれたての風をガラス瓶にしまいこむよりマシなのかもしれないけど。右から二番目の椅子の上には、血判書と『マリアによる福音書』を置いて小旅にでることにしよう。きみには古里ってなかったよね。ぼくが都会の更地が古里なんだといった時のきみの素っ頓狂な顔ったら。それはなくていいんだ。ぼくのそばに毎日エサをあげる石さえあれば。そして少しばかりおしゃべりがすぎるフチグロトゲエダシャクがいてくれればいい。おいしいボカディージョを食べたくなったら二人で汀を散歩しよう。古謡をよく知ってるウミンチュと人魚の掛け合い唄を聞くのもいい。あるいは書きかけの詩篇を海面にさらして形相と質料を語り合ってもいいんじゃないか。雨風が強くなると閉じ込められてしまうよ。一歩も出られない。ノオトに書くしかないんだ。時がいつくもいくつも過ぎ去って、書かれた文字がかすれ、紙がボロとなっても、誰かが読んでくれる。だから記述するんだ。在ることと在ることのあわい、失ってしまったこと、立ちながら泣いたこと、けっして甦ることができないと分かったあの悲しみとあの更地。

神戸から 島尾敏雄を問う

文学・思想 そして奄美の位相から

リレートーク　at 神戸文学館 2017.10.21

資料篇

は、島尾の仕事を「顕彰」することではなく「検証」することだ（言い換えれば〝偉人〟ではなく〝異人〟として捉えること）。それは島尾を神戸の作家として読み直し、神戸という地から島尾文学全体を俯瞰すること。奄美群島にかかわる人たちにとっては、島尾が記述した「奄美」ないし「琉球弧」を思想・表現の位相であらためて再設定すること、であろう。島尾は魅力的な作家である。彼が投げかけたエクリチュールはいまもわれわれを刺激してやまない。そして〈トシオとミホの物語〉は作家夫婦のリアルなありようとして普遍的な様相を呈しており。いつまでも記憶されつづけるだろう。

▼神戸と奄美から島尾敏雄を問い直す

大橋愛由等

生誕百年を迎えた作家・島尾敏雄を、神戸と奄美から問い直そうとの試みである。島尾は生涯さまざまな場所にかかわったが、どのトポスにいても〈異和のひと〉でありつづけた。強烈な出自意識をもつミホ夫人に影響されながらも、あくまでも作家としての透徹した（あるいは醒めた）視座から、かかわった場所や、夫婦関係を記述していった。いまわれわれの「島尾語り」をする人たちに求められているのは、島尾の仕事を「顕彰」することではなく「検証」することだ（言い換えれば〝偉人〟ではなく〝異人〟として捉えること）。それは島尾を神戸の作家として読み直し、神戸という地から島尾文学全体を俯瞰すること。奄美群島にかかわる人たちにとっては、島尾が記述した「奄美」ないし「琉球弧」を思想・表現の位相であらためて再設定すること、であろう。島尾は魅力的な作家である。彼が投げかけたエクリチュールはいまもわれわれを刺激してやまない。そして〈トシオとミホの物語〉は作家夫婦のリアルなありようとして普遍的な様相を呈しており。いつまでも記憶されつづけるだろう。

▼神戸の作家としての島尾敏雄

高木敏克

島尾敏雄は第二次世界大戦中の南島における特攻艇隊長としての体験を描いた「出発は遂に訪れず」や夫婦愛の修羅場を描いた「死の棘」の作家であるが、その表現の宿命的な資質の根源を書ききった基盤は神戸時代の創作活動にあった。

１９２５年から１９３６年までの多感な青年期と１９４５年から１９５２年の大学講師時代７年間をあわせた18年間を神戸で過ごしている。

その間に挟まれる戦争末期に学徒出陣の特攻隊長として奄美群島で一年過ごした体験はその後の彼の生涯を決定づけたことは確かだ。しかし作家活動の基盤を決定づけたのは神戸時代の18年間であり、その後の東京の生活は修羅場の３年間となった。

「夢の部分の研究」といわれる夢の形で内部世界を象徴主義的かつ超現実的に詩のごとく描き出す島尾敏雄独特の詩的小説の世界は18年間の神戸生活を経て３年間の東京時代に頂点を迎えることになる。その詩的小説の主な舞台となるのは奄美群島と並んで神戸の自然と街並みである。神戸の山に登っても街を歩いても島尾敏雄の痕跡が自然と共に静かにわれわれを待っている。この夏、私は島尾敏雄の聖地ともいえる奄美群島の大島と加計呂麻島島を訪ねたが、そこでは島尾敏雄は神聖に祭られていた。

このことは私にとってかなりショックなことであった。どうして神戸の人々は島尾敏雄のことを忘れているのだろう。さらにショックなことは島尾敏雄を知らない人がいることだ。奄美に行けば誰でも彼のことを知っている。それならば奄美と神戸を結ぶことによって島尾敏雄の世界を浮かび上がらせるべきだ。そこにはヤポネシアを提唱した島尾敏雄の世界観も見えてくるだろう。さらには、決して明るくはない山脈の深い闇に包まれた神戸の視点での神秘的な島尾敏雄の世界観も浮かび上がってくるだろうと思う。

生誕百年　神戸から島尾敏雄を語る　2017.10.21　at 神戸文学館

▼コンセプター・島尾敏雄

喜山荘一

島尾は驚く。喜界島から与論島までの島々は、ふつう外からは「奄美」と呼ばれているのに、ひとたびその内部に入っていくと、あまねくは通用しない。なにしろ、昭和に入るまで、自分たちが「奄美」に属し、そう呼ばれていることさえ知らなかった島人もいるくらいなのだ。外からそう呼ばれているのに、島の人はそのことを知らない。また知っていても使われることがない。不思議なことだった。

それは単に島人が、無知や無関心だということではない。「奄美」を包含する「琉球」という言葉に対してがそうであるように、知っていても、そう呼ばれると拒みたい気持ちがせり上がってきて、落ち着かないのだ。島を越えた名が、根づかない。だが、島尾は、奄美から沖縄、宮古、八重山までについては、ひとくくりにして呼びたかった。なにしろそこはサンゴ礁の島々であることは共通しているのだ。

そこにひとつの輪郭が見えるのに、その名がない。あるいは定着しない。しかし名前がないということは存在しないということではないのか。島尾はそこで、「琉球弧」という言葉をつかむ。

名づけが要る、と島尾が感じたものは、もうひとつあった。日本にも、「日本」という言葉では捉えきれない余剰がある。日本と呼ぶのでは、それが見えてこない。そこで掴まれたのが「ヤポネシア」だった。

このことは島尾敏雄自身についても言えるだろう。彼は小説家には違いないが、そう呼んで済ますには収まりきれない余白を持っている。島尾は、名づけられていないものに概念を与えるコンセプターでもあったのだ。

「琉球弧」と「ヤポネシア」への反響に恐縮するように、発表後は控え目な態度を取り続けた島尾だったが、それはコンセプトを投げかけたままにしたことを意味していない。やむにやまれずというほどに、そこに内実を与えるための探究は終わることがなかった。そしてその果てに彼が表現してみせたのは、人類学者も民俗学者も描き切っていない南の島の野生の思考とも言うべき世界だったのである。

喜山荘一（きやま・そういち）
奄美群島・与論島生まれ。マーケター。企業の商品開発や販売促進を支援。著書に、『珊瑚礁の思考』『奄美自立論』『聞く技術』『10年商品をつくるＢＭＲ』他がある。

生誕百年　神戸から島尾敏雄を語る　2017.10.21　at 神戸文学館

▼ヤポネシア論と「奄美」

前利　潔

島尾　戦後「奄美」を論ずる場合、島尾敏雄とヤポネシア論を無視するわけにはいかない。島尾は20年間（1955～75）にわたって、「奄美」の地から小説群（『死の刺』他）と、非小説群（「ヤポネシア論」他）を発信しつづけた。ここでは、ヤポネシア論と「奄美」について考えてみたい。

「ヤポネシア」という言葉が一般化し、かなりのひろがりをもって受けとめられるようになるきっかけとなったのは、谷川健一が『日本読書新聞』に発表した「〈ヤポネシア〉とは何か」（1970年元旦号）である。谷川によれば、「単系列の時間につながる歴史空間」としての「日本」に対して、「多系列の時間を総合的に所有する空間概念」として存在するのが「ヤポネシア論」である。この言葉からわかるように、ヤポネシア論は時空概念である。

大陸にへばりつくように存在する日本列島の位置を、南太平洋の島々を主題として調節してみると、一つのグループとしての「日本」の姿が見えてくる。そのことが大陸からの影響ばかりを気にする、硬直した「日本」のとらえかたをほぐしてくれる。南太平洋の島々とは、ヤポネシアという言葉があらわすように、「ポリネシア、ミクロネシア、メラネシア、インドネシア」のことであると、島尾はいくつかのエッセイに書いている。

歴史教科書をひらくと、近畿や関東などのいわゆる「中央」を中心においた「単系列の時間」が記述されている。琉球弧の島々が登場したとしても、辺境の島々として記述されるにすぎない。それに対して「多系列の時間を総合的に所有する空間概念」としてのヤポネシア論は、琉球弧や東北の歴史も、日本列島の歴史として正当に位置づける。

沖縄と「奄美」では、ヤポネシア論の受容の仕方に違いがみられる。沖縄の思想家たちは、新川明の「反復帰」論に代表されるように、ヤポネシア論を日本という国家に包摂されることを拒否する思想として受容した。ところが、「奄美」側はヤポネシアと視野を広げることによってはじめて、〈奄美〉を〈日本〉という国家に正当に包摂することができる思想として受容したのである。ヤポネシア論の理解の仕方がまちがっているというのではない。ヤポネシア論がそれだけ「柔軟性と普遍性」（新川明）をもっているということであり、沖縄側は〈琉球国〉の記憶で、「奄美」側は〈日本国〉の記憶でヤポネシア論を受容したといってよい。

新川とともに島尾と交流のあった岡本恵徳は『「ヤポネシア論」の輪郭』（1990）において、ヤポネシア論の根底のモチーフには、「奄美」の人々が「本土」に対して持つコンプレックスを払拭したいという、島尾の願いが強く働いていたと指摘している。現在の「奄美」は、そのコンプレックスから解放されたようにもみえる。その背景には、世界自然遺産登録候補、元ちとせに代表される島唄などの「奄美」ブームがある。

「奄美」という言葉が氾濫している。沖永良部島出身の私が、ここでカッコ付きの「奄美」としたのは、「奄美」という言葉に対する違和感があるからである。島尾は「奄美の呼び方」（1959）というエッセイで、次のように書いている。

「奄美」という言い方は、いうまでもなく、古く律令時代に既にこのあたりの島の名として記録されていて、今は総括の名として用いられているわけだが、沖永良部島や与論島で、自分の島が奄美と呼ばれていることを知ったのは、やっと昭和にはいってからだというし、それぞれの島はそれぞれキカイであり、トクノシマであり、エラブ、またヨロンであって、観念的にはアマミの中の一つだと理解しても、島々のあいだに差異が多く、何となくぴたりとこないふうだ。

島尾のこの言葉は、現在でもそのまま通用するのではないか。

前利潔（まえとし・きよし）知名町教育委員会。奄美群島・沖永良部島在住。「〈無国籍〉地帯、奄美諸島」（『反復帰と反国家』）など奄美に関する論考多数。

吟遊カルメン神戸句会

★創刊20周年を迎えた「吟遊」

2017年、「吟遊」は創刊20年を迎えることができました。これもひとえに、読者のみなさんの暖かい声援をはじめとして、同人諸氏の俳句・HAIKUにかける情熱、そしてもちろん代表・夏石番矢氏と編集長・鎌倉佐弓氏の奮闘なくしては、達成されるものではありません。10月19日には東京・学士会館において創立記念パーティを開催。盛況のうちに終えることができました。そこで関西でも創刊20年を記念する言祝ぎのイベントをしようと企画しました。11月19日（日）に「吟遊カルメン神戸句会」を開催いたします。神戸は夏石氏にとって父祖の地です。みなさんふるっての投句、句会参加をお待ちしています。

2017年11月19日（日）午後1時～5時

★神戸句会への案内
神戸は、あらたな文学が生まれる沃野です。土地の地場性はうすく、〈ここにあること〉への執着が少ない都市環境であるがゆえに、反対にさまざまな文学潮流を自ら生みだそうとする機運が産出される文学風土なのです。2013年に第1回「吟遊カルメン神戸句会」を開催しました。「世界俳句」を標榜している夏石氏と吟遊らしく国内外から意欲的な俳句・HAIKUが投句され、刺激的な句会となりました。今回もまた前回をうわまわる作品があつまるものと期待しています。世界文学としての〈俳句・HAIKU〉を実感できる神戸句会に参加して文学の快楽を共有しましょう。

》》》句会について
★開催日／2017年11月19日（日）午後1時～5時
★開催場所／神戸・三宮にあるスペイン料理カルメン〒650-0012 神戸市中央区北長狭通1―7―1　2F　電話 078-331-2228
★参加費／千円（資料代など）　※投句のみの方は無料
★参加資格／「吟遊」の句会ですが、参加資格はありません。誰でも参加できます。
★作品締め切りは、11月13日（月）です。
★投句先／神戸句会の事務局をつとめる大橋愛由等のメールアドレスまでメール送信してください。maroad6645 4@icloud.com
★作品について／俳句は三句（自由詠）、有季・無季は問わず、字足らず・字余りは気にしません。日本語以外の言語表現なら三行にまとめてください。英語俳句は翻訳は必要ありませんが、英語以外の言語表現なら日本語訳ないしは英訳を付してください（参加する人たちはなんとか英語は読めると思いますが、他の言語は読解できないとおもいますので）。作品だけの参加も可。
★この句会は「吟遊」同人ばかりでなく、誰でも参加できる句会です。みなさんの参加をお待ちしています。

◆「あいだ」の断絶を超えようとするパラノイア的な意志から招来される音像

有時秀記

視線を少し上に向けると、天井からコードにつながれた十二個の電球が三列掛け四列で等間隔にぶら下がって大部屋を満遍なく照らしている。電球には適度な大きさの美麗なランプシェードが整然と被っている。それを確認して視線を少し下に移し、私は眼を閉じる。すると、ランプシェードから今しがた照らされていた灯りと同じような色合いの黄ばんだ写真の記憶が脳裏によみがえる。

幼児の写真だが、その顔はどうやら今の私に少しばかり似ている。記憶にあるのはあくまで記憶の像でしかなく、そのままの幼児は今では存在しない。それは過去と名付けられる痕跡の中に沈んだ像である。今の私とは明らかに断絶があるが、しかし、この断絶を断絶とは断言できないという意識のもとに、今の私と私の面影が少しある像の痕跡をつないでいるものは記憶の切れ切れの断片に過ぎないと思われる。写像の幼児は明らかに記憶された像としての痕跡存在でしかない。痕跡の中では私は失われているのである。

そして私に白昼夢ならぬ真の眠りが訪れ、大部屋の椅子に座したまま夢の森に入る。この森の中で夢は波のような谷と山の反復に似て、無意識と微かな幻像が夢の波間に交錯する。無意識は波の谷間では空無そのものである。だが、夢の頂きに至ると、半覚半睡的記憶を漂わせているらしくランプシェードの黄色っぽい色と幼児の黄ばんだ写真の黄色っぽい色の同質性をぼんやりと感じている。

しかし記憶の中の意志には、今という時点と痕跡像の「あいだ」の見えないものを見ようとする強烈な意志が埋め込まれている。そのため黄色っぽいという色感の同質性によって、夢の波の山場にあっても今と痕跡像との「あいだ」の断絶を乗り超えようという意志が夢の意識の中で固執的になってくる。ギリギリとした歯ぎしりと共に波の山場が夢の中で継続して、「あいだ」に横たわる断絶を超えなくてはならないという意志が偏執狂的になる。夢の山場が「今」であり、黄ばんだ幼児の写真は「痕跡」に過ぎないと夢の中でも意識は声なき声で断言する。にもかかわらず断絶した「あいだ」に架橋しようとするパラノイア的な意志の強さは変わることがなく、なぜ痕跡像が今の私と同一ではないのかという疑念が湧きやまず、ギリギリと歯ぎしりは止むことがない。

痕跡像には不安のかけらもなく、「無垢」そのものを表しているが、夢の波の山場には累積した不安群や汚穢群と、痕跡を単なる痕跡と認めようとはせずに、断絶を超えて「あいだ」の中に見えないものを見ようとする強くかつパラノイア的な意志が螺旋形のように巡っている。あたかも今に至るまでの「あいだ」もまた「無垢」だと確証しようとするパラノイア的意志があれば「無垢の全一性」が現前するというかのように。

不可能なものへのパラノイア的な意志が夢の波の山場には存在する。これは「今」に課された夢の中の狂性ないしは強迫観念であるようだが、黄色っぽさへの同質性に端を発した超越的意志は「無垢の全一性」への偏執狂的意志である。しかし、その意志は如何にしても「無垢の全一性」には到達し得ずに、不可能性の残余を免れ得ない存在意志である。

この「あいだ」の断絶を超えようとして超えられない夢の山場のさなかで照明がより明るくなり、周囲の雑音とともに、夢の波は消え、目覚めが訪れる。覚めた意識は、痕跡像とランプシェードの黄色っぽさの同質性を今や、周囲の雑音と色の混在したスペクトラムとして認識すべきだと心得る。自らをスペクトラム状の「溶ける時」の音像と同化すべく、更にパラノイア的な意志を強くする。「溶ける時」は、「あいだ」の中の歪みやねじれを確実に復元し律するのが難問と想われるにもかかわらず、スペクトラム状に継続存在していると錯覚させる。この錯覚を「溶ける時」と喩えると、今や黄色だけでなく多くの色彩と共感する音像が偏執狂的な耳、その実、共感覚的なる耳目に聴こえるのである。こうして二つの主体たる「今の語る私」と「痕跡としての聴く私」の声と音と色が夢の中から発生して、外化されながら内界を奏でる原初の浜辺に、ようやくたどり着いた感がある。(もっとも「あいだ」の空疎にはパラノイア的痕跡が必須の病像のように残っているのだが。)

そこは外界の美麗な花びらに内なる聖涙が混在するような無垢な音像領域である。原初の浜辺に続く宇宙の何ものかが作り出した音曲像が、「語る私」と「聴く私」を、彼方と深淵に精神を分裂させることもなく、静かに、落魄からも遙かに遠く響き続けるのである。

◆冬の夜空に漂うものが確かにわたしを追い越すことのないという幻想

geschwind wie der wind

月村 香

わたしはそのときまだ湖と白鳥の関係を知らなかったのではなくわたしは湖と白鳥の関係をまだ知らないその湖と白鳥の関係はまだわたしよりもmeltしていなかった大人がなんとなくそこから汁をすっていのをわたしは知っているしかしその弁証法は永遠にそれ以上突き上げてゆかないことをわたしはもどかしくしかもにたにたするほどにわかっているが答えをはっきりさせないでわたしを苦しませるってそれわたしをからかってるのとそんな気のないくせにインキの流れる方をそろりそろりと見せるからやさしくない女はその奥義に決して近づけないよってそういう手管が好きなのねさっきから止まっていたアイロンのプレス器が警告音鳴らす市井の音符たちはパチンコと同じで人をdécontracterさせるらしいがわたしは両方とも一度もやったことがないわりとバカにしたもんでもないよと言うがわたしが目をむくから誰もわたしを連れてはゆかないことばは魔である(魔力ではない)使えば醜女は天女である男は女が好きだああそれでわかったコンクリートの上にギシギシ刻まれた論文を読みながら思想は自我が丸出しだロジカルコンクリートサマーアンドウィンターだ残念ながらわたしは自分がどんどん下品になってゆくことに少しずつためらいを感じなくなってきたこれはいけないもう遅いなしかしながらロジック色の詩は上品でありがちにしてわたしの書く詩が下品であろうともわたしの方が効能は上品(ぼん)ではないかと湖がもやかすよよけいなおめかしパウダーとルージュよりもくずおれたものにあてがうパンスマン(=包帯 pansement=penser+main→手に包帯をする=手負いに考えを施す)わたしはしかして下品でよい幸いわたしには擁護してくれる人がいないだから何だいつからわたしはこのように自己を抑えず勝手になり始めたのかわたしはその理由を知っているわたしは偽りではあるが神を見たのであるということのまたしても偽りよああ恥ずかしいそうちょっと羞恥心が残っているのだが!もうきちんとしているのがたまらなくなったのだつまるところものすごく生きているのだ雲が霧がわたしの速度に追いつけないのだかなりの勢いで堕落しようと…誰がこの情勢を抑制できるかねと哲学者はいつも言っているではないかいつまでもわたしたちを自分にattirerさせておくために

◆硝子工房

中嶋　康雄

硝子工房で働く工員の屈折率はまちまちで
率が大きい工員の心臓は右や背中で鼓動している
工員の流す涙は硝子玉なので
落ちると割れたり転がったりする
転がる涙は一箇所に集められ
決められた日にいつもの痩せた爺さんが
醤油をかけて食べてしまうまで
出鱈目に光っている
歪んだものは食べ残される
食べ残しは青虫のように移動し
コンクリート壁の貧相な突起物につかまって
歪んだ蛹になる
工房から死人が出ると
蛹は透明の蝶になり
蝶も歪んでおり
中止勧告が出るまでキラキラと飛ぶ
工員が不注意などで硝子を割ってしまうと
鞭で打たれる
鞭で打たれた場所は
みみず腫れになり
かさぶたが透明な硝子なので
体液の醜い流れが見えてしまう
工員は賭博が大好きなので
いつもすっからかんで
家賃が払えず工房の隅で寝泊まりをする
「かあちゃん、ごめんなさい」
泣きながら眠っているその涙は
嘘で濁っている
「嘘が硝子を磨くのだ」
と喚く背中が
高利貸しに追い掛けられる
給料袋には明細が入っているが
差押さえやら前借りやらで
現実の支給額はほとんどない
「蝉の腹より空っぽだねえ」
笑って今夜も安酒をあおり
工房の板間で汚い毛布をひっかぶる
小便がキラキラ光り始めたら
そろそろ蛹にならなければならない
動けない蛹の間に
引っぺがされて捨てられる
たまたま見逃されたところで
蝶になってしまえば
もうひらひら飛ぶくらいしか能がなく
隣のトタン屋根の施設で泣く幼児の血管に
さっさと懺悔して
消えるしかない
もう時間がない

◆駐車場

中嶋　康雄

駐車場が増えている
地蔵がうろついている
店内は冷房がきいている
地蔵が試食に群がっている
地蔵が下げている変な模様の鞄に
万引きする商品が入っている
長い間
いすにすわる男から
すえた臭いがする
いつの間にか男も地蔵になり
試食品を口いっぱいに頬張っている
駐車場のアスファルトの割れ目から
セイタカアワダチソウが生えている
根もとの茎が茶色くなっている
頭にはあばただらけの葉っぱが生きている
地蔵がなにかに腹を立てて
ブツブツ独り言を言いながら
腹癒せにセイタカアワダチソウを踏みつけている
小さな輪ゴムが落ちている
突然
地蔵の小便に洗われる
地蔵の排尿器官が僅かに勃起している
駐車場にたくさんの着飾った槍投げがやって来る
花火の話をしている
花火は今夜打ち上がるらしい
暗くなるまでに
全ての槍を投げ終えてしまう
仕方なく帰路につく
乗ってきた自動車の車体に
ひっかき傷がついている
「昨日、車検が終わったばかりなのに・・・」
深い溜息をつく様子を見て
地蔵が残り少ない斜陽にまぎれて
クツクツ笑う
カネゴンはお金が好きな怪獣だ
のっぺりとした駐車場は
カネゴンよりもお金が好きで
貧しいお金を吸って生きている
地蔵が
万引きした菓子パンの
袋を開ける
貪り食いながら
歯槽膿漏の口を開けて
クツクツ笑う
試食コーナーで余分に貰った
爪楊枝で
黄色い歯をほじくっている
遠くで
雷が鳴っている

◆ほえるテクノロジー

高谷和幸

ほえる＝シーツに覆われたあなたがいた。電子の赤や緑のラメをほどこした光るあなたの郵便箱のところへ、「へだたりは意味を持つのでしょうか」。その周りを周回した。その夜、「人生を言葉の側から見つめれば」郵便箱は姿を変える「煙り」みたいだった。

からだ＝表層の起伏を覆い隠したもの、「煙りのような」と見送る人がひそかに噛み殺したもの。わたしになって「軽いステップで」叩いてみる。「一行一行がちがうものになっていく。なにかの暗示みたいに「波うち際をはだかのひとが歩いている」。郵便箱のような一軒の家があった。

百の郵便箱の一つが「ほえる」のではない。「あなたのようだったベコニアの赤い花」。その声の志向性の波。それの頂点にある「破壊性」。遅れてやってきた波をもちあげて、それは遠くから「ほえる」みたいだ。二足歩行の鳥が飛び、足の生えた魚が歩く砂の丘に、「ほえる」複数性の声が樹のからだを猛烈にしならせている。

神戸詞（うた）あしび

116-2017.10.29 大橋愛由等

のっぴきならぬ尾崎翠と風土の接合関係

詩人たちの旅に同行した。

高谷和幸氏が主催する詩の会「カフェ・エクリ」は毎年一回一泊旅行をしている。

今年訪れたのは鳥取県岩美町。ＪＲ姫路駅に集合して一台のマイクロバスに乗り込み、一路鳥取に向かった。

車内では運転手以外はすでに酒盛りが始まっていた。気心しれた文学仲間なので、のっけから雰囲気が打ち解けている。

目的地には一時間半ほど遅刻する。どうもすこしだけ遠回りをしてしまったようだ。

日本海が見えると車内から歓声があがる。このあたりの風景はかつてより多くの歌人たちによって詠われ、但馬が産んだ歌人・前田純孝が住んだ兵庫県の諸寄集落も近くにある。

到着したのは、岩美町浦富の「旅人の宿ＮＯＴＥ」。宿の女主人・小林晶さんが笑顔で迎えてくれる。この宿は冬になっても日本海の代表的な味覚である蟹料理は出さない。スペイン料理を提供するのである。小林さんは少しの間、スペイン料理カルメンで修行した。彼女の申し出をオーナーであるわたしが受け入れたのである。そしてもちろん出てきた宿の料理はスペイン料理のかずかずだった。

この岩美町を詩人たちに誘引したのは、小林さんの奮闘をたたえたいのと、同町出身に尾崎翠（1896-1971）という小説家がいるためである。

代表作「第七官界彷徨」は文庫化されていて、戦間期にかかれた小説という時代的制約はあるものの、いまも根強い人気を保っている作家である。

岩美町には尾崎翠を紹介するボランティアの人がいて、この町がこの作家を大切にしようとしている姿勢がうかがえる。

案内されたのは、翠が教員をしていた時の住まい、尾崎翠資料館、母方の実家である西方寺（西本願寺系）など。そのどれも翠の息遣いが感じられ場所だった。

翠が執筆していた時期は短い。昭和８年ごろには東京を引き払って地元・鳥取に帰っている。帰郷してからも執筆の意欲があり、友人にも支えられていたが、鳥取時代にあらたな作品を生み出すことはなかったようだ。東京時代に幻覚症状に悩まされるなど身心の不調が極まったたのである。

執筆したのは長くはなかったけど、翠が刻した記憶はしっかりと地元に根付いている。冬は雪がふり、風も強く、耐える時間も短くない。そんな風土のなかに翠は育った。そして嬉しいのは、地元でしっかりと翠の文学的営為を支え続け、記憶をつむいでいる人がいるということだ。

文学そして作家というのは、かくして風土とのっぴきならぬ接合関係にあるのだ。

鳥取県岩美町の「旅人の宿 NOTE」

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.127
神戸

2017年10月29日　通巻127号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等（「Mélange」同人）
maroad66454@gmail.com
定価600円(税別)